

■内覧会、まちづくり便り等への意見（追加分）

■まちづくりの方向性について

1	田老地区は、旧田老町。現在は宮古市の田老地区となっているが、ひとつの町だった所なので、被災した場所が、町の中心という意識が強いと思う。町の中心地をどこに定めるかによって住みたいと思う場所が定まってくるように思う。内覧会の会場では市職員さんに「どこに住みたいですか？ここでは嫌ですか？じゃあどこなら良いですか？」と矢継ぎ早に聞かれたが「公的機関等はどこに来るか、大まかにでも決まっているか？」との問いには曖昧な回答であったし、高台移転の候補地も地図上で非常に大まかな円で囲まれているだけで住宅再建を考える上ではこの乏しい情報の中で判断するのは難しく思えた。住宅再建には大金が必要だし、必ずしも移転地に再建できる人ばかりではないのだから、「どこに住みたいか」と言われても現時点で「ここに住む」という言葉は無責任な結果になる可能性を持つ答えでもあると思う。この震災で被害をまぬがれて生活している地区もあるわけで、その地区の方々と被災した地区の人との感情的な部分での溝がこの先の田老の中での隔たりを生むのではないかと非常に危惧している。双方の立場でのまちづくりの意識調査、それを公開したうえでの意見交換・検討が必要だったのではないかなと思う。また事業スケジュールによると、住宅再建までの年数は長い時間となる。このことは、震災以前から田老の町に見られる若者の流出、高齢化は必須と思う。ならば、高齢者を意識した町の姿を示した案を提示・検討していく必要もある。将来、廃墟となるような場所にはなって欲しくはないが、「まちづくり」の難しさを強く感じた。 （30歳代 女性 内覧会）
---	--

■移転について

1	防潮堤で津波を防ぐには限界があると思う。今回の津波では平坦地がほとんど被害を受けているので被災していない住民を含めて集団で高台移転を望みます。海で仕事をしている人が安全に避難できるように防災タワーなどの施設の建設も。小中学校は安全な場所へ移転。 （30歳代 女性 内覧会）
2	乙部、青砂里の高台について、平地である。真崎入口からの三王閣道路青砂里乙部取付道路や水道水等、浜に近い。旧町にも近い。グリーンピア、新田平、古田地区より高低差がない。海が見える。南向の地である。背に山をそう一等地であると思う。越田部落より三王閣道路迄赤線あり。その取付赤線道路乙部・青砂里にも3本もの道路があります。 （70歳代 男性 便り）
	復興計画案観覧させていただきました。私は高台移転案に賛成です。まずは私個人の意見としてお聞きください。可能であれば全戸をグリーンピアの敷地を造成し町ごと移転できたら最高です。グリーンピア裏手（水沢方面）とゲートの反対側（小堀内方面）を造成し住宅地にして全戸を移転はできないでしょうか。（全部で何戸あるのかわかりませんが、現在の仮設の数くらいになるのでしょうか。） その中で一戸建てを建てたい人、借家でも良いという人も出てくるかもしれませんが、アンケートをとり住宅を建設していくのが良いと思いました。もともと借家の方や独立したい若い世代、来るかわからないけど転入してくる方もいると思うので市営住宅や復興住宅も充実させてもらいたいです。 縦貫道も十年以内にできるとのことなので、グリーンピアの敷地に宮古市として企業を誘致してもらい若いお母さんたちの働く場所を確保することが先決に思います。グリーンピアの保育所に預け、グリーンピアの敷地内の職場で働くお母さんたちを繋ぎとめることができれば田老の町に残る若い人達も増えていくのではないのでしょうか。基本的に職場のある町に住みたいものですか

ら。大きな声で言えないですけど、最近はお母さん達も多いです。意外と過疎地で子供が増えているという話も聞きます。そんな人を迎え入れる職場も必要かと思いました。若い担い手が後を継ぎたいという仕事、若いお母さん達を繋ぎとめる地元での仕事場の確保が課題になると思います。まずは全戸もしくは被災地域家屋だけでも高台移転を支持いたします。

(40 歳代男性 内覧会)

■避難路について

- 1 娘が内覧会に参加させていただきました。計画については特に意見はありません。皆の意見が多く反映されていて、理想的だと思いました。
- 私的な要望になりますが、自宅裏付近（田老字小田代）に避難路を整備していただきたいです。3 月 11 日当日は、家族が仕事で誰も居らず、運転ができない私は自宅前でウロウロしていました。近所の人の「津波だ！」の声で、自宅裏の山にかけ上がりました。かけ上がったのは、私を含め 5 人です。今回の震災を踏まえ、地震が来たらすぐ櫛内を目指して逃げることを心掛けてはいますが、避難路があれば夜間などとっさの時に逃げる手段となり大変心強いです。近所は全半壊の被害を受け 10 世帯程度になってしまいましたが、ご検討していただきたいです。
- (60 歳代 女性 内覧会)

■検討の進め方・メンバーについて

- 1 私は今回の内覧会の前から復興検討委員会を傍聴させていただきましたがその委員会の運営、協議の内容などに非常にちぐはぐなものを感じていました。協議は、平面図によって地域の構造を論議されているようでしたが、感ずるところ平面図では委員の方たちも地域住民もイメージとしての捉え方に多少のズレがあるように思われます。まず共通の確たる認識を持って論議あるいは説明をするには、立体的な図画（3D、CG）で持って確認する必要があると思います。このまま平面図で協議を続けていくと後々に問題が起こる可能性があります。ものが出来上がってから私の考えはそうじゃなかったという事が各々から出てくる状況も考えられます。
- また、土地の利用、施設の配置などの検討に於いても、ただそこに土地があるからということだけでイベント広場とか公園のある商業地とかいろいろありましたが、そういうものをただ平面図に埋めていっただけのことの様に思えます。
- “まちづくり”というものは産業（漁業、農業、商業等）、観光、地域の機能性（アクセス等）そしてまちなみを含めた地域全体の景観など総合的なバランスを考えて創るものだと思います。
- たとえば、産業や雇用の問題を取ってみても、企業誘致なのかそれとも自分たちが新しい産業を起こして企業化するのか？企業誘致にしても多種多様多岐にわたって企業がある。どんな企業が自分たちの地域に適しているのか、自分たちが起業するにはどんな産業がいいのか等の考え方によって土地の利用の仕方も大きく変わってくると思います。また、それによって地域の景観も変わってくるし、その景観そのものが観光にも大きく影響を与えるものだと思います。
- 復興は復旧の段階から考えるものだと思います。現在、港湾・道路の復旧が行われているようですが復旧すると元の港になってしまいます。まず、今回の津波に対して本当にこの港で良かったのかどうか、地域には検証しておかなければならない箇所が多々あるのではないのでしょうか。
- “復興まちづくり”は後世に受継ぐ“ふるさとづくり”です。今のやり方では正月やる福笑いの“おかめ”のようなアンバランスな町が出来上がるのではないかと心配しています。バランスの取れた街あるいは町をつくるためにはトータルでものを考えて、ある程度出来上がった総合的なものを“素案”とすべきだったのではないかと考えます。
- (60 歳代 男性 内覧会)

■内覧会来場者（60歳代男性）からの意見書

田老地区復興まちづくり計画（素案）に関する意見及び感想

① 土地利用の方針について

移転対象	危険な区域は <u>近くの高台等</u> に移転する、一部移転を支持する。 全戸移転には反対です。
移転先	田老地区の <u>中心区域に近く</u> 、現在90世帯が暮らす大平地区自治会の震災前のコミュニティ維持を図るために「 <u>アイノ山</u> 」を <u>近くの高台</u> の候補地に含めることを希望します。 これは、宮古市東日本震災復興基本計画の「復興まちづくりの方向性」に合致します。 工事費用を理由に次善の策を採用することは、将来に悔いを残すことになり、歴史の評価に耐えることにはならないと思います。
野原地区	今度の津浪で最大波高16mを記録し、防潮堤を含め壊滅した地区であり、地区全体を非可住地にすることを支持する。 また、土地利用については、運動施設、自然・観光体感施設、水産物加工体験施設、津浪・歴史資料館、鮭なんでも館、屋外プール、オートキャンプ場、四季おりおり花畑、有機栽培野菜の分譲農地を配置する。 但し、大きな資本投下を伴う工場や事業所の配置については、事業者の意向によるところが大きいと思われるので、住居についての個別意向調査とは別に企業や組合の意向調査も必要ではないかと思われる。
漁港地区 (堤外地)	漁業、水産業のための土地利用は当然のことと受け止める。 加えて、シーサイド・リバーサイド公園、イベント広場を復活して頂きたい。 また、港湾の一部を縮小し、以前のような美しい砂浜を復元して未来に繋ぐと共に、漁業資源の回復力や海水の浄化作用及び景観の向上並びに自然とのふれあいを拡充する地区にする。

大平地区 (駅前)	計画素案では嵩上げて可住地にするとなっているが、嵩上げ後の土地の高さが海拔何mになるのか。また、シミュレーションでは、駅前は何mの浸水高になるのか。明示されない現時点では判断が出来ないでいる。 商業地とすることに依存は無いが、災害市街地復興区画整理事業が導入されると防災集団移転促進事業による高台移転が不可能となるので嵩上げには同意しかねる。 出来れば、区画整理後の駅前には駐車場とロータリーを配置して、周りに地域特産品等を取り扱う商業施設及び観光、文化、芸能並びに歴史等を紹介する施設を集積する。区画整理と高台移転が同時に実現できる方策を見出して頂きたい。
国道45号の 山側	現在、居住する住宅区域を除き、非可住地に指定する。 津浪の浸入を前提にした土地利用方法が合理的に思える。 配置が可能なものとしては、水産加工場、林産加工場、電子部品・金型工場、自動車部品工場、太陽光発電所などがある。
二線堤と国道 45号の間	上記、国道45号の山側と同様の土地利用とする。
乙部、青砂里	野原地区と同様の土地利用とする。
野中地区	野原地区と同様の土地利用とする。

②道路、防災等の施設配置の方針

防潮堤	一線堤と二線堤の分離で、防潮堤の2重化を実現することにより、二線堤から山側までの地域への津浪越流水量を減少させ、減災を実現できる。 防潮堤水門は河川との関係で減らすことは不可能と考える。 また、防潮堤を乗り越えるスロープについては、徒歩用か車両用か明示されていないが冬季の積雪や凍結また夜間時の大規模震災（津浪）を想定すれば必ずしも必要度は高くないと思われる。 防潮堤の洞門は、海側から速やかに高台等に避難するためまた、越流した津波を速やかに排水するため、適正ヶ所に設置する必要がある。
避難場所、 避難タワー、 ブリッジの 整備	保育所、児童館、診療所、小・中学校及び高校の体育館等公共施設の内、安全な施設を避難場所に指定し、救援物資を常時保管する。 防潮堤（一線堤・二線堤とも）から最寄の避難場所に避難できるブリッジを適所に設置する。 高台の避難場所への迅速な避難がかなわない場合に備え、野原地区や野中地区に、それぞれ1ヶ所避難タワーを建設する。

避難路、 避難道	避難路は避難弱者に対応できるスロープや階段、そして照明器を設置し、かつ避難施設へ通じる連絡路（コリドール）も兼ねるものにする。 避難道は避難場所までの最短ルートで、徒歩や自動車と同時に混在しながら避難することを想定して、道路の両側に歩道を設け、かつ2車線とする。
公園の整備	野原地区や野中地区に整備する。 但し、子供の育成に役立つ機能も備えたものとする。 イベント広場は、駐車場確保の観点から漁港地区（堤外地）が最適である。 兄形地区は新たな土地確保が伴うので「三陸北縦貫道」建設との関係で必ずしも適地とは云えない。
道路	防潮堤を乗り越す道路の合理的な理由が見当たらないので支持できない。 国道45号の小林地区から長内地区までの間は、津浪を回避するため、現在より山側を通るルートに変更して、かつ高架とする。 新たに建設する避難道を含め、旧市街地の道路は全て、歩道や自転車専用道路が整備された片側完全一車線とする。
排水施設	排水施設の建設ではなく、田の沢川、赤沼川の中流部から合流河川との高低差の改善工事を行うと共に長内川や田代川への放流口を改修する。
鉄道駅	現在地を支持する。 駅は、地域住民、観光客、通勤客・通学生の憩いの場として利用できる解放施設にする。
小・中学校	学校の移転に合理的な理由は無いので支持できない。 小・中学校は津波対策を取りつつ可能な限り、現在の位置とする。 但し、新たな土地を確保する必要の無い方策のひとつとして、現在の公民館体育室の敷地に、図書館、保育所、児童館、学童の家、診療所が集積できる6階以上の鉄筋コンクリートのビルを建設する
その他	震災前の田老市街地を中心にした復興を目指すため、田老地区住民の分散を抑えると共に、公園、運動施設、文化施設、産業施設及び公共施設等は人命重視しの観点から、海側から順に山側へと適正に、その配置を決め、最も大切な命とそれに付随する財産のひとつである住宅を高台に移転することにより、後世に悔いを残さず、歴史の評価に十分堪えられるものにする。

■「勝手になどだーり、田老をかだっぺーす会」からの意見書

第7号(1月15日発行)

地区復興まちづくり便りに関して、ご意見をお寄せください。

以下の欄に、項目に沿ったご意見を記入いただき、下記あて先までご提出ください。

なお、ここで頂きましたご意見は、今後予定している地区別の「検討会」等を進める上で参考とさせていただきます。

◆あなたのお名前、性別、年齢、ご住所、電話番号を下の欄にご記入ください。

お名前	性別	年齢	現在の住所
ご連絡先(電話番号)		復興前の住所	

※いただいた個人情報につきましては、一切公表いたしません。

ご意見をいただく地区を右にご記入ください。

田老地区

※今号の地区復興まちづくり便りに掲載されている地区に限ります。

◆上でお選びいただいた地区について、以下のテーマに沿ってご意見をご記入ください。

1. 第3回地区復興まちづくり検討会の検討内容について、あなたのお考えをお書きください。

(例：●●地区についてはこんなことも考えられるのではないか)

1月21日(土)東京都内で開催されました「勝手になどだーり、田老をかだっぺーす会」田老町出身者、田老へボランティアで参加してくれた方、田老をニュースで見た方、田老へ旅行したことのある方、田老へ支援活動をしている方など、10代～70代までの33名から出された復興に関する意見を簡単ではありますが、取りまとめましたのでお送りいたします。客観的に見えてる町外からの貴重な意見でもありますので、是非とも1月30日の田老地区の検討委員会で、お取り計らいのほど宜しくお願い申し上げます。

(意見書：別紙 10 枚)

次回のまちづくりの会および検討会での検討に活かすため、今号へのご意見は、できるかぎり1月25日(水)までにお寄せください。これ以降でも、いつでもご意見をお待ちしています。

■この意見記入用紙は以下のあて先までFAXまたは郵送、ご持参によりご提出ください。

また、まちづくりの会の資料を配布している場所に備え付けの提言箱、Eメールでも提出ができます。

宮古市 都市整備部都市計画課 計画担当 ランドブレイン株式会社

住所：宮古市新川町2番1号

住所：宮古市磯築1丁目2-8

FAX：0193-63-9115

FAX：0193-77-3639

Eメール：toshi@city.miyako.iwate.jp

Eメール：miyako-fukkou@landbrains.co.jp

■ 復興計画についての意見、要望など

2012年1月21日

・完全高台移転

→4度目はあってはならない。町全体を完全移転

・垂直避難型パークタウン構想

→中高層マンション（1階は駐車場や倉庫、2階、3階はお店や集会施設など、住居は4階以上）で、複数棟を渡廊下的なものでつなぎ、さらに高台へ通じさせる高台への避難路を確保、マンションの周りは1戸建てを建築し（1戸建て住居希望者向け）、緊急時の避難は中高層マンションへ避難、そこから高台へと移動（避難時間の確保）

※ 老人など避難時に時間を費やす方々を中心の住居とする

※ 建設場所＝第一堤防の内側、川向地区か上荒谷地区候補

・素案（2つから）住民選択

→地域関係なく、高台移転希望者には高台移転の選択、街中希望者には街中選択

・一部高台移転

→学校などの施設は高台移転、住居は選択

・高速道路インターを考慮した高台移転と町づくり

→インターチェンジ周辺を中心に町を形成する、素案に組み込むべき

・グリーンピア（小堀内地区）を中心としたまちづくり

→あらたに山を土地を造成すると時間がかかりすぎる

・行政は住民にすべてを隠さず説明（住むまでの日数、住宅建設にかかる費用負担、今までの住居買い上げ関連など）したうえで、住民へ判断(選択)させる。

→住民が情報を持っていないすぎて、素案からも選択判断できない（家は国が建ててくれると思っている住民もいる）

・素案が実際に動いて住民が落ち着くまでの期間に何回か段階をふむ必要があるのでは。

→仮設住宅生活から脱してあげないと、住民の精神的な疲労が懸念される、実際に市営住宅を建設して仮設から一時的にでも脱する仕組みが必要ではないか。まちは段階的につくるようにした方がよいのではないか。

・素案は先まで考慮されていないように思える、未来を（特に近未来）見据えて議論し決めるべきではないか。

→まちはつくったが機能的にも全く総合的に生活に不便を感じるまちづくりでは決してあってはならない

・移転について、利害関係が生まれないようにしてほしい

→移転先の所有などで、利害でのトラブルのないように勧めてほしい。

・神戸でも最終的にまちづくりに15年かかった地域もある、実際に大変困難なこととは思いますが、今ある、今できることを出しあい、そこからの選択肢があってもいいのではないか。

→高台移転希望者は高台、既存の場所は既存、ほかの件はほかというように。ただし、安真できるハードの建設がポイントにもなる、いち早く避難できる仕組みはソフトと並行してすすめ、一時避難的なシェルターや、避難タワーは必須。

・田老は過去において自分たちだけで防波堤を築き、防災の町としてきた、今回の被害での復興についても、田老が他によそに誇れる完全なモデルを作り（行政指導でも、素案でも、斬新なものでも）上げるべき。

・ゼロからのまちづくりだからなんでもできるはず、なのに素案にかんしては自分たちの案ではなく、押しつけられたもの 肉付けしたもののように思える

→いろいろと意見を出し2つだけでなく、産業も考慮した仕事を考えた（生活基盤）ものを前提として議論するべき

・ソフトを重要視するべき

→逃げる意識の仕組みを確立させる、老人や体の不自由な方も考慮すること

・富古の角力浜の件をもう一度見直しするといろいろと見えてくる。

・仕事がないとハードをどうするかにはつながらない

→生活の糧がないと住民が住むにはつながらない

・20m以上の防潮堤の建設

→極端な話、被災前の住居跡に戻りたい人はもどる、高台に移転したい人はする。しかし防潮堤を20m以上、30mくらいの超スーパー堤防を建設する。

・まちづくりがきまったあとのハードをどう考えるか

→ポイント＝①沖防波堤の設置場所や規模、②港湾の整備 ③防潮堤の規模、形 ④河川と土手（津波をいなすための河川の移設） ⑤路地の作り方（五番の目を少しずらして波の新入時間を稼ぐ） ⑥地下道シェルター（一時的な避難確保） ⑦高層住宅 ⑧国道や高速道路の場所やインターの場所

※ 以上ではありますが、検討員会などですでに議論されていることもあるとは存じますが、町外から意見として取扱っていただけたらと存じます。

皆様、素案に対してどうのこうということじゃなく、それぞれの思いを出してくれました。ひとつ皆様が申していたことの共通点は住民に選択させるようにお願いしたいということでした、自分らが選択しこれから住むということになるものですから。

勝手になどたり、田老をかたっぺーす会 私見書

本日はお忙しいところ皆様ご苦労様です。

私は田老には住んだことがないのですが、母親が出身者で親戚が田老で暮らしています。今回の津波では親戚にも大きな被害がありましたが、それぞれ仮設住宅や在宅で踏ん張りながら生活しています。

本日は家庭の事情で東京に駆けつけることができず、書面での参加となりますことをお許し下さい。

まず、田老で犠牲となった方々へ哀悼の意を表するとともに、日々田老の復興に尽力されている関係者の皆様やボランティア、そして今日お集まりの皆様に心より敬意と感謝申し上げます。

先ほど申し上げたように私の親戚は田老に点在し、ある者は個人宅を、ある者は商店を、そして家が無事でしたが生活が劇的に変化した者など多岐にわたります。

震災から10ヶ月、そういった親戚や田老町民である大人、子どもたち、関係者と接していく中での考察を元に、今後の田老がどのように立ち直っていけるのかを「私見」という形で考えてみました。

机上の空論というか妄想のようなものになるかもしれませんが、自分でも整理してみたかったので「叩き台」のようなものと取ってください。

今回まちづくり検討会から提案されている案は、「居住」に焦点を絞ったハード面の青写真と聞いています。

理由付けは詳しくはわかりませんが、「防災第一」なのか「利便性第一」なのか「商業第一」なのかという点がどれもあいまいな気がします。

ですので、私個人で優先順位を決めました。

これから田老で生活していく上で、何を第一にして何を後回しにするかということです。望むべくは全ての順位を同じくして進むべきですが、町民が「オレがオレが」では何も進みません。

ですので、この優先順位を町民全員が共有できるかというところにスタートラインが決まるので、そうそう簡単なことではないでしょう。

ですが、理念がしっかりと共有されていれば何を決めるにも「ものさし」があるので進みやすいはずです。

私の考える優先順位は以下です。

①【こどもたちが安心して育つ環境を】

②【4度目の津波には絶対にやられないという理念を】

③【生活が完結できるまちの仕組みを】

私の考える柱はこの3本です。

①まず第一の「こども」のことです。

当然津波に遭わないということもありますが、まずは田老では「子どもが大事にされている」ということを最初にうたってみてはいかがでしょうか。

田老の復興は防浪堤の復旧や大人たちの「意欲」だけでは成せません。ましてやこれから何十年もかかっていくには、次の津波が来るかも知れませんが大人たちは年老いていきます。

その何十年もかかる復興には今の子どもたちやそのまた子どもたちが田老に留まらない限り厳しい話ですが高齢化どころか消滅するかもしれません。それが現実ではないでしょうか。

例えば子どもたちが通っている学校は、安全な所にあるのかという点。

在学児童に関しては、今回犠牲となった生徒はいなかったようですが帰宅した児童が1名のほか、幼児も亡くなっています。田老の尊い財産でした。また、学校だけでなく、児童館も浸水しています。

防災で子どもを守るのは「義務」ですが、一方で田老の子どもはもっと豊かに育ってほしい気がします。

学習や体験、グリーンピアの避難所で見た高齢者と子どもが関わっていく姿にもっと日常的にこうした機会があってもいいと思いました。

こうした子どもたちが安全に、そして豊かに学び成長していける町であれば子どもは町を裏切らないのではないのでしょうか。

②第二の理念、「津波に負けない」ことです。

残念ながら田老は過去3度の津波に襲われ、多くの犠牲者を出しました。

とりわけ「津波防災のまち」をうたいながらの昨年の犠牲はいわば「敗北」です。

負けないために守るというのわかります。現に普代村では防潮堤が町を救いましたが、田老は条件が違います。

ご存じのように田老の防浪堤は「守る」ためではなく「逃げる」ための構造物でした。これが果たして20メートル、30メートルと高くするだけで犠牲者は無くなるのでしょうか。かさ上げをすることで住宅は流されずに済むのでしょうか。

「逃げるが勝ち」とも言いますが、てんでんこは悲劇以外何ものでもありません。

津波に勝てなくとも絶対に負けない方法は、海と対峙しないことだったり海と対峙していればいつ何時でも逃げられる体勢にあること、そして絶対に「生活を侵されないこと」だと思います。津波が来ても犠牲者を出さず、生活が継続できることを成して初めて「負けなかった」ことになるのではないのでしょうか。

もし将来、数十年後百年後に同じような津波に襲われ同じような犠牲を出したとき、その時の町民は今現在の町民を愚かだと嘆くかもしれません。

三陸の各地で先人が賞賛されている集落のように、私の考えをより具体的にまとめると、「住居は高台、農水産業は低地、商業は適地」ということになります。

③生活が完結できる仕組みとは・・・

簡単に言えば、「宮古に行かなくても生活できる町」です。

子どもを育てるにも、買い物をするにも、収入を得ていくにも田老は単独では非常に不便な町です。

宮古市と合併した経緯とは違うのですが、田老の住民はとなりの旧宮古市に生活の多くを「依存」している現状ではないのでしょうか。

漁業や水産業など、田老の中で展開している産業ももちろんありますし、これからもその従事者はその再生のために動き出していかなければならないのも確かです。

しかしながら、町民の大多数は宮古市や近隣の町へ働きに行き、生活しに帰ってくるのではないのでしょうか（正確な資料がないので、断言はできませんが第二次産業という点では明らかに不足しているという前提です）。

そのような状態で今回の津波に襲われた場合、一番早く生活を立て直す方法は近隣の町へ転居してしまうことです。改めて書くまでもありませんが、人口流出は田老存続のためには大きな問題です。元々町を出たいと考えていた人が震災をきっかけとして町を去る、いわば「流出決壊」のような状態ではないのでしょうか。

しかしながら、「郷土愛」や「がんばろう」だけで説得力もなくその「決壊」を食い止めるのは津波を防浪堤だけで守ろうとすることと同じです。

「この町にいたらこんないいことがある」ということを考えてみるのも効果があると考えます。そのために田老の利便性やアイデンティティー、イメージを上げる仕掛けを提案します。

具体的には・・・

■ 低地（平場）の農地利用

第一次産業として農地を開墾し、田老産の野菜や果物を露地またはハウス栽培して出荷する。東北産の野菜は原発風評被害もあり苦戦しているが、宮古の北という立地やハウス栽培という安全性を盛り込めば出荷が見込めるのではないかな。

また、全国からも就農者を募集し農地を安く貸し出すことも可能。田老在住者は無償で作付けできるなどの特権を与える。

田老の過去の歴史から見ても、平地が空いていれば必ず人は住もうとするのでそこに縛りをかけるという意図もある。

■ 自然エネルギーの利用促進

以前、どこぞの大学で田老の平地利用案にあった、太陽光発電のプラントを農地と併設したり海上に設置し、その電力を町内の住宅全てに配電するしくみ。

当然高台で暮らしている町民も対象として、限りなく光熱費をゼロにするエコタウンとして展開していく。「エコ」というキーワードは全国からも注目され、特区として売電事業や二酸化炭素排出量取引でその投資分を回収する。

市外からの移住者も期待できる。

■ 第二次産業の誘致

前述のエコタウンに関連して、太陽光パネルの工場やその他自然エネルギー関連の工場を誘致し、土地を無償で提供する。

田老の中に就労先ができるだけでなく、市としても法人税などの収入が増えるメリットがある。

立地は町内の低地として、津波対策に避難タワーや避難路といった対策は必須。

例えばこれだけの「仕掛け」がありますが、大きなテーマとしては利便性よりも「自給自足型ニュータウン」という考えです。

自分たちの町で働き、自分たちの町で消費する、そして野菜やエネルギーまでも生産

してしまう、究極の自給自足です。

こんな町でさらに近くに海と山の大自然がある、まさに夢のような町になりますよね。

企業誘致などは未知数にしても、これから使おうとしている宅地のかさ上げや防潮堤の嵩増しなどの膨大な費用を考えると、低地の農地転用や太陽光ブランドの設置費用は軽く捻出できるのではないのでしょうか。

以上の3つの柱を勘案し、具体的な田老像をもう一度まとめます。

- ◆堤防から内側は全て商業地とし、外側は農地や自然エネルギー利用、居住地は現在田老地区に残っている世帯以外は全て周辺の高台を開拓して移転する。
- ◆高台は町の周囲の山を削るもしくは斜面に沿った階段状の造成地を作る。小枝地区や楡内地区などの既存集落も最大限有効活用する。
- ◆漁業従事者や商業関係者は周辺の斜面の土地や、三王閘があった地域を漁業住宅地として提供する（港へのエスカレーターなど通路の整備含む）
- ◆住宅については平地の土地は高台の土地と無償交換とし、造成費は無料とする。
- ◆産業道路としての三陸道早期整備を進め、企業誘致のための流通経路として湾口の整備も早急に進める。
- ◆子どもたちが安全にそして豊かに学べる（遊べる）拠点づくりを始めるために、大平地区の上流側に田老総合学校（小、中、高校）や子どもの文化拠点施設、児童館、体育館、野球場などを作る。
- ◆現在の田老一小および田老一中敷地は宅地として利用。
- ◆子どもたちと田老の高齢者、職人などを結びつける交流センターや産業実習センターなどの独自のとりくみを試みる。
- ◆究極のエコタウン構想を定住促進の目玉とするため、農地転用や再生可能エネルギーの利用など、震災を逆手に取るビジネス展開からより先進的なニュータウンとして生まれ変わり、全国から注目を浴びる「津波再生都市」として再出発する。
- ◆田老の古き良きも残し、歴史をいつまでも受け継ぐ流れを作るために、田老にある遺産や自然を残し、先人を敬う田老であることを忘れないようにしたい。
- ◆そしてもっとも重要なのは高台へ移住してもコミュニティが崩壊しないようなくみ（元いた地区単位もあるが、仮設住宅でのコミュニティも徐々に形成されているので新しい枠組みも必要）を考えること。
- ◆高台と平地、田老駅、総合学校、グリーンピアなどを結ぶコミュニティバスを無料で運行し、地域間格差をできるだけ少なくする。

おわりに

未来への最大の遺産は「生きていくこと」です。

子どもたちが田老を好きになって、田老で結婚して田老で子供を産む。その繰り返しを千年先も絶やさないだけでなく田老に続く漁業、産業、自然、とりわけ津波の教訓も受け継いでいかなければなりません。

「千年先を考えるのに10年かかることなんてたいしたことじゃない」と田老の親戚に言われました。

もちろん一刻も早い復興を願っているのは当然ですが、「夢のようなまち」を目指すことでその10年もあっという間に思えるかもしれません。

「簡単に言うな」と怒られるでしょう。

でも子どもたちはどう思うのでしょうか。やはり怒るのでしょうか。

子どもたちがもし怒るのであれば、4年で急いで復興計画を進めて元の田老に少しでも近づけられれば良いと思います。ただし子どもたちがこれからもずっと住み続けてくれるのであればです。

私がこの提案の中に、漁業や商業を入れてないのは、漁業は先人たちがやってきたように自ら復興する力があると信じていますし、商業は人が残れば必ず入ってくると考えています。

投資しなければならないのはとにかくまず子どもです。

くどいようですが、子どもが幸せになれば大人も高齢者も幸せになります。そして未来が拓けます。

このような私見を提案させて頂きましたが、夢であり妄想であっても震災前から過疎化が進んでいた町を再生するには普通では考えられないような「起爆剤」が必要です。

かといって誇大な風呂敷を敷くつもりは毛頭ありませんし、制度を活用したり企業とうまく結びつくのは今しかないという思いで投じてみました。

ですが、一番意見を聞いてみたいのは子どもたちであることは確かです。

子どもが幸せに田老で育っていくには子どもたちに聞くのが一番です。ある親たちは自分の子どもを「田老から出たほうがいい」と諭すそうです。そんな田老でいいのでしょうか。このことを最後にお伝えして、提案とさせて頂きます。

末筆ながら皆様のこれからのますますのご活躍を祈念いたします。

2012年1月21日